■ フォト・エッセイ ■

シリア的ライフ・スタイル

写真・文
高橋理枝
Rie Takahashi

ダマスカス市内風景（2007. 5 の大統領信任投票を控えていたため、市内の各地にアサド大統領を支持する横断幕が飾られている）

郷に入ったら郷に従え、とはいうものの、シリア的ライフ・スタイルに慣れるには時間がかかる。

一日が基本的に二部構成である点が日本と大きく異なる。第一部は、昼寝前。仕事や学校に行き、その後、一日のメインの食事である昼食をとり、昼寝で締めくくる。第二部は、昼寝後。日も暮れてから、ショッピングにくりだしたり、レストランや喫茶店で友人達と集ったりする。店の営業時間も二部（たいてい九時頃から午後四時頃と、午後五時頃から夜九時頃）に分かれていることが多い。店主や店員達も一度店を閉めて自宅に帰り昼食をとる。

朝食は出勤前にとるので、仕事の後の昼食までが非常に長くなる（ちなみに公務員の勤務時間はだいたい八時半～午後三時で、昼休みはない）。空腹をしのぐ秘訣は間食だ。職場によっては一〇～一二時にお茶を飲みながらサンドウィッチ等をつまむのが慣例になっているようだ。しかし、これはあくまで間食にすぎない。

だから、シリア人に午後四時や五時に招かれたら、昼食に招かれたと考えなければいけないのだ。時間が遅いからと言って、けっして食事をとって出向いてはいけない…。シリアに赴任したばかりの頃、友人に昼食に招待された。時間は当日目処がついたら連絡するという。家庭料理がたらふく食べられる、とその日は間食も控えて連絡を待ったが、なかなか電話がかかってこな

かつてのマルジェ市場（1994冬。飾られているのは当時まだ健在だった前大統領の写真）。2006年に都市整備のためこの市場は閉鎖されたが、市内にはこうした市場がいくつも存在する

右が代表的シリア料理の一つ、クッベ。ひき肉と砕いた小麦で、具（ひき肉とクルミ等）を包んで揚げたもの

前菜（上方の二つは羊の生肉。オリーブオイルと香辛料等であえて食べる。全く生臭くなく、ネギトロのような味わい。）

マルジェ市場の肉屋（1994冬）

い。シリアの昼食がかなり遅いことは知っていたが、午後二時を過ぎてようやくかかってきた電話で、「五時に来て」と言われた時は、昼食ではなくお茶だったかとさすがに不安になった。空腹で行けば腹が鳴って恥ずかしい。かと言って食べてしまうと食事が出された場合、大変なことになる（アラブ式もてなしを断ることが大層困難なためである）。悩んだあげく、食べずに行くと、料理がずらりとならんだ食卓に案内された。空腹を我慢してよかったと安堵したものだ。

さて、たっぷり昼食をとったあとは昼寝である。これは、特に暑くて体力を消耗する夏には必須である。また夜遅くまで出歩くシリア人と付き合うためにも必要である。

夜の約束はたいてい八時か九時。特に夏は少しは熱気も和らぐこの時間帯から人々は活気をとり戻す。街中は人で賑わい、公園のベンチは涼みに出た人々で座るところもなくなる。レストランには八時半過ぎになってようやく客が入り始め、宴もたけなわの一〇時半頃、アラブ音楽の生演奏が始まる。このシリア・スタイルを知らない外国人は、七時頃にレストランに行って客が他にいなくて不安になったり、さっさと帰って生演奏を聴き損ねてしまったりするのだ。

外に繰り出さない場合でも、友人宅や親戚宅を訪問しあって、ベランダや中庭でお茶やお酒を飲んだり、料理をつまんだりし

ウマイヤド・モスク近くの喫茶店の語り部。夜八時頃から昔話や英雄譚などを語り始める。手に持った棒をたたいて白熱した合戦シーンを演じているところ

ダマスカス旧市街のアラブ式住居の中庭。テーブルの奥に見えるのは噴水。こうした中庭で夏の夜はお茶やお酒を飲みながらおしゃべりを楽しむ

水タバコ。生リンゴをくりぬいてタバコの葉を入れるようになっている変り種（通常は陶器の入れ物）。喫茶店でこれをくゆらしながら何時間でも滞在する

夜のダマスカス市内の繁華街ハムラー通り

ながら、おしゃべりに興じることが多い。ほかに娯楽がないとも言えるのだが、特に焼け付くような日差しに耐えた後の夏の夜のそぞろ歩きや友人たちとの集いは格別だ。これぞシリア的生活の楽しみ方なのだ。

しかし、この二部制のライフ・スタイルに身体が慣れるには時間が必要だ。毎晩遅くまで出歩いてよく体がもつものだと思うのだが、シリア人に聞くと「昼寝するからさ」とのこと。だが、慣れていないと昼寝後の寝覚めが悪く、かえって疲れた感じすらする。疲れがとれたのか、増したのかわからない朦朧とした状態で、昼寝ですっかりリフレッシュしたシリア人に同行するのは最初はつらかった。しかし、慣れてくると夜が待ち遠しくなるから不思議だ。

シリアに来て半年ほど経った頃、隣国レバノンの首都ベイルートに出かけた。国境越えを含めて車で三時間程度の距離である。私はいつものように午後三時過ぎまで仕事をし、昼食と昼寝を終えて、夜のベイルートに張り切って出かけた。かつて中東のパリとも呼ばれたベイルートの洗練された店々でのショッピングは、シリアに住む者の憧れだ。私もお洒落なお店で思いっきり買い物をするつもりだった。ところが、市内でも有数の繁華街は、八時前だというのに人気が少なく、店仕舞いを始めている。歴史的にも文化的にも共有するものの多いシリアとレバノンだが、ライフ・スタイル

ケバブとトマト。友人宅でのバーベキューにて

泉からの水がごうごうと流れるのを眺めながら食事を楽しむレストラン。ダマスカス近郊には有名な泉がいくつかあり、観光地化している。（2007春）

満開の果樹畑と花を楽しむ人々。ゴミがちらかっているところもお花見ならではか

PHOTO ESSAY

シリア / Syria

は異なるようだ。夜出歩かずに皆どうやって楽しむのか私には不思議でならず、いかに自分がシリア化されたかを知るハメになった。

しかし、そんな肯っ張りのシリア人が唯一、真昼を楽しむ季節がある。春だ。

寒くもなく暑くもない気持ちの良い気候、柔らかい日差しににわか雨、木々も芽吹き、花も咲く…。この季節、人々は、お花見やピクニックに昼過ぎから外に出かける。

ある日、大家さん夫妻から突然電話がかかってきて（シリア人の誘いはいつも突然だが）、ピクニックに行かないか、と言う。正午過ぎ、ダマスカス近郊の果樹畑に到着すると道の両側いっぱいに、真っ白な花が咲き乱れており、その下をふらふらと花を楽しむ人々の姿があった。日本では、中東といえば砂漠、というイメージばかりだが、あんずやピスタチオの花が一面に咲き乱れる景色は日本の桜にも匹敵する美しさであった。

この時ばかりは、日本もシリアもあまり変わらない、と思ったのだ。もちろん大家さん夫妻は、ピクニックの後、昼寝をして、夜になるといつものように街中に出かけていったのかもしれないが。

（たかはし　りえ／アジア経済研究所図書館資料企画課）